

イディオム学習への認知的アプローチ 2

八木橋 宏勇*

A Cognitive Approach to Idiom Learning II

Hirotoshi Yagihashi*

Yagihashi (2006) discusses the processes through which idiomatic expressions are generated and proposes that tracking the motivations and bridging the gap between the literal and figurative meanings through imaging are useful as clues for memorizing and recalling idioms. This is effective in learning all types of V+NP idioms. The purpose of this paper is to prove how convincing this approach is also with regard to *one-shot idioms*, which are not adequately dealt with in Yagihashi (2006).

1. はじめに

日本人英語学習者にとって習得が最も難しい項目のうちの一つはイディオムである。個々の構成要素の意味と全体の意味との関係が不明瞭であることが大きな要因であると思われる。イディオム研究でしばしば分析対象とされる *kick the bucket* がその代表で、kick, the, bucket という構成要素それぞれが「死ぬ」という意味のどの部分にどのような貢献をしているのか捉えづらい。このように全体の意味が構成要素の意味の総和からは推測しがたいユニットがイディオムである。それゆえに、ほとんどの学習者はイディオムの「形」と「意味」を機械的に丸暗記しようと試みているというのが現状である。しかし、英語学習者にとってこの丸暗記が何よりも困難を伴う作業であることはいままでのない。

八木橋 (2006) では、イディオム学習への効果的なアプローチとして、イディオムがメタファおよびメトニミによって生み出されているという事実に着目し、そのプロセスを遡ることが「記憶へ押し込む手がかり」「記憶から引き出す手がかり」となることを論じた。そこでは、経験的に構築された生産性の高い心的イメージである概念メタファおよび

概念メトニミによって動機づけられたイディオムを中心的に採り上げた。結局、イディオムは恣意的な語の結合ではなく、言語を用いる人間が、無数に存在する語の中から理由があつていくつかを選び出し、それらを有意味に関連付けることによって生み出した産物なのである。

本稿は、八木橋 (2006) では十分に論じることができなかった「単発的イディオム」(one-shot idioms) の存在を指摘し、その効果的な学習法について考えてみたい。それにより、八木橋 (2006) を補足しながら、イディオム学習で重要なことは、個々の構成要素の意味とイディオム全体の意味の隙間をいかに埋めるかという主体的な営みにあることを主張したい。なお、紙幅の都合上、今回はメタファに関わるもののみを採り上げる。メトニミに由来するイディオムは Kövecses (2002, ch14) および八木橋 (2006) を参照していただきたい。また、メトニミと「単発的イディオム」との関係については稿を改めたい。

2. 先行研究

Kövecses (2002, ch14) は、イディオムの動機づけについて概念メタファを用いて明快に論じてい

*東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師
2007年9月21日 受理

る。我々の概念体系に形成された概念間の対応関係の中で、特に具体的な言語表現を生み出す生産性が高いものが概念メタファ (conceptual metaphor) である。

2.1. 概念メタファ

次の例は概念メタファ ANGER IS FIRE と LOVE IS FIRE によって生み出されたものである。つまり、「怒り」や「愛」という抽象的な実体が、「火」という視覚的に捉えることが可能なより具体性を持った実体の観点から捉えられている例である。

ANGER IS FIRE

- (1) After the row, he *was spitting fire*.
- (2) *Smoke was coming out* of his ears.
- (3) He *is smoldering with anger*.
- (4) Boy, am I *burned up!*

LOVE IS FIRE

- (5) The *fire* between them finally *went out*.
- (6) I *am burning with love*.
- (7) She *carries a torch* for him.
- (8) *The flames are gone* from our relationship.

怒りや愛に関わるイディオムが fire, smoke, burn, torch, flame といった「熱」あるいは「火」という領域に属する語で構成されている。これは「はらわたが煮えくりかえる」といった日本語にも観察される捉え方である。言語や文化を超えてある対象が同様の見方で認知されているということは、そこには恣意的な関係ではなく、何らかの動機づけがあるのではないかという見解に辿り着く。事実、怒りや愛がもたらす体温の上昇という生理作用と高熱の火との間には、「温度の高さ」という類似性に基づく対応関係が結ばれているのである。両者は、身体的、生理的、感覚運動的、知覚的経験や経験的に蓄積された慣習的知識をもとに抽出されたものである。人間であれば誰もが必ず経験することであるがゆえに、概念体系の中で高度に一致する形態で確立されていて、概念メタファは多くの表現を生み出すメカニズムとなっているのである。

2.2. 概念メタファの心理的実在性

先に見たように、fire, smoke, burn, torch, flame など表面的には異なる語が用いられていて表現が違えども、「怒り」や「愛」など表現したいことが同一の概念 (ANGER IS FIRE, LOVE IS FIRE) で捉えられているということは、イディオムは単に言語の問題ではなく「概念の問題」であると想定される。事実、概念メタファが我々の概念体系に実在している根拠を示す研究が多くなされている。

Lakoff and Johnson (2003: 246-249) は、多義の体系性、推論パターン的一般化、詩的メタファや新奇メタファへの拡張、プライミングなどの心理学研究、ジェスチャー研究、史的意味変化の研究、談話分析、手話分析、言語習得研究の観点から論じているが、イディオムとの関連で興味深いのは Gibbs and O'Brien (1990) による心理言語学的な実験結果である。それは、概念メタファによって動機づけられているイディオムが喚起するイメージには母語話者の間で高度な一致が見られるというものである。筆者によるインフォーマントテストでも、例えば *spill the beans* (秘密を漏らす) は①「小さい豆が密封容器から不意にこぼれ出る」②「豆が床に散らばると厄介なように、秘密が漏洩されて取り返しがつかない事態になっている」というイメージの一致が得られた。字義通りの表現にはない、この活き活きとしたイメージの喚起があるため時を経てもイディオムは使い続けられるのだろう。

さらに抽象的なもので具体的なものを喩える例を採り上げ、概念メタファの実在性を示したい。

- (9) Streets that follow like a tedious argument
(T. S. Eliot)
(果てしなく続く議論のように果てしなく続く道)

池上 (1975: 245) は、〈具体〉→〈抽象〉という一般的な有契性の方向づけが上の例のような詩的メタファでは逆転することがあると述べている。それには普通ではない形式を選択したからこそ得られる特別な効果があるという。「道」という具体的なものが「議論」という抽象的なもので喩えられているわけであるが、これは抽象的な「議論」という概念に対してよりはっきりとした心的イメージが形成されていないと不可能なメタファだと思われ

る。出発点と到着点がある議論の途中でなかなか決着をつけることができずにいる様相が、「道」という概念に写像されている例であるが、これは「議論」という概念の諸相が ARGUMENT IS WAR (Lakoff and Johnson 1980: 4-6) という概念メタファによって心的に構造化されているために成立しているメタファであると思われる。つまりこの概念メタファが「議論」という抽象的な実体に輪郭を与え我々の概念体系の中に確立されているがゆえに、一見したところ(抽象)→(具体)という通常は見られないメタファも可能となっているのである。

ここまで見てくれば、概念メタファの心理的実在性を認めない理由はないように思われる。先にも述べたように、概念メタファには言語や文化を横断して観察されるという普遍的な側面がある。厳密に言えば必ずしもすべての概念メタファがそうであるとは言い切れず、また言語によって概念メタファの実現形式(つまり概念メタファを基盤に産出された実際の表現)に相違が出てくることも事実であるが、言語学習という側面から考えると、利用しうる資源は有効に取り扱いたい。次節ではイディオム学習の側面から概念メタファを考えて行きたい。

2.3. イディオム学習への効果的アプローチ

—八木橋 (2006) の要点

イディオム学習が困難である主な理由は、構成要素の意味と全体の意味の関係が不明瞭であるために、記憶することへの負担が非常に大きいということである。相澤 (2006: 35-37) によれば、記憶のプロセスは①情報を記号化する「記銘」(coding) ②符号化した情報を貯蔵する「保持」(storage) ③情報を検索する「想起」(retrieval)、この三段階から構成されており、この「保持」は「記銘」の際の情報処理の深さによって影響を受けるといふ。「処理が深くなるだけ記憶痕跡がしっかりとして忘れにくくなる(処理水準効果)」(相澤 2006: 35) のであり、単に丸暗記するという作業では情報処理が浅く記憶の痕跡がほとんど残らない。ゆえに覚えられないのである。横山 (2006: 55-56) は形と意味のような対応関係の習得を促進するものとして①「有意味度 (meaningfulness)」②「親近度 (familiarity)」③「心像性 (imagery)」を挙げている。「人間は意味のないものよりは意味のあるも

のを認知しやすく、また馴染みのないものよりは馴染みのあるものへ注意を向けやすい。対象を心的に表象できるということはそれを『知っている』ということであり、表象の輪郭が明確であればあるほど深く『知っている』ということになる」(八木橋 2006)。つまり、「情報処理の深さ」は、「有意味度」「親近度」「心像性」によって左右され、その度合いに応じて記憶の痕跡が形作られる(あるいは形作られない)ということである。この痕跡がしっかりとしていればいるほど『記銘』『保持』『想起』といった記憶のプロセスの達成度を押し上げることになる。つまり、学習の質が問われているのである。」(八木橋 2006)

「なぜそうなのか」という attention を向け、「なるほどそうなのか」という awareness-raising を高める、そして「そういえばあれも同じだ」という networking を促すという流れを実行することが認知的スタンスを採用することで可能となる

(田中 2006: 176)

田中が論じるように、概念メタファを利用してイディオムを体系化することで、「なぜそうなのか」「なるほどそうなのか」「そういえばあれも同じだ」という個々のイディオムを network 全体の中で習得することが可能となる。つまり、イディオムの生成過程を遡ること、そして母語である日本語と同様の捉え方がなされている場合にはその知識を利用すること、逆に日本語と相違がある場合にはその違いを意識すること、これらは「記憶へ押し込む手がかり」となると同時に、「記憶から引き出す手がかり」ともなるはずであり、記憶の痕跡を深く残すことが可能な学習プロセスである。つまり、イディオムの個々の構成要素の隙間を心的イメージで結びつけるのである。

しかし先に挙げた *kick the bucket* は「死ぬ」につながる心的イメージが形成しにくい。なぜなら、このイディオムで用いられている *bucket* は、元はフランス語(獲物を吊るす棒という意味)であるため、現代に生きる我々が理解しうる文字通りの意味「バケツを蹴る」とはほど遠いためである(詳細は八木橋 (2006) 参照)。

しかしながらイディオム学習において重要なこ

とは、学問的に「真理」かどうかではなく、目的に対してどの程度「有用」であるかということである(在間 2006: 22)。イディオム学習の場合、部分と全体の意味関係を有意味に結びつけ「記憶に押し込む手がかり」と「記憶から引き出す手がかり」を得られればよいのである。したがって、例えば現代的解釈を用いて「バケツに上がり首に縄をかけて自分でバケツを蹴って自殺する」というイメージを持つことができればより深い情報処理を行うことは可能となるのである。

3. 単発的イディオム (one-shot idioms)

これまででは、Kövecses (2002, ch14) を中心に、概念メタファとイディオムの関係をイディオム学習という観点から考察してきた。しかし、そこではまったく言及されていない種類のイディオムがある。それは一見したところ概念メタファが関わっているとは認めにくく、生産性があるとは思えないメタファによって生み出されたイディオムである。Lakoff and Turner (1989: 91) は、一般性を持たないために概念メタファを構成する概念とは認められないような特定の概念的対応関係に基づいて生み出されたメタファを「単発的」(one-shot)と表現している。本稿では、一般性が認められる概念メタファを直接的には構築していない概念(イメージ)(cf. Lakoff and Turner 1989: 89)によって動機づけられているイディオムを彼らの表現を借用して「単発的イディオム」(one-shot idioms)と呼ぶことにする。この単発的イディオムが概念メタファと無関係であるかと言うと実はそうではなく、背後には包括的レベルのメタファと呼ばれる抽象的な概念メタファが潜んでおり、そのことが効果的なイディオム学習へのヒントとなることを示したい。

3.1. 単発的イディオムと包括的レベルのメタファ

Taylor (2002: 500) は *spill the beans* を採り上げ、この *beans* は“confidential information”の意味で用いられているメタファであるが、このような解釈が機能するのはこのイディオムだけであり、この1回限りのメタファは概念メタファの典型ではないと論じている。確かに *beans* を「秘密情報」

という意味で用いている表現はほとんど見出せないであろう。つまり、生産性が乏しいがゆえに *CONFIDENTIAL INFORMATION IS BEANS というイメージは概念体系の中に根付いてはいない。よって、*spill the beans* は単発的イディオムに分類されることになる。

しかし、単発的イディオムだからと言って概念メタファと無関係かというところではなさそうである。*spill the beans* 以外の秘密に関するイディオムを見てみると、次のような空間概念の認知が関わっているのではないかと想定される。

●STATES ARE LOCATIONS

(bounded regions in space)
(状態は場所である)

●CHANGES ARE MOVEMENTS

(into or out of bounded regions)
(状態の変化は移動である)

(Lakoff 2006 [1993]: 204)

これらは広く一般に観察される概念メタファで、包括的レベルのメタファと呼ばれるものである。具体的な表現を生み出す基盤であるという点で、先に見た概念メタファと性質が同じであるが、LOVE IS FIRE などよりももっと抽象度が高いため、さらに幅広い概念領域において用いられる概念メタファがこの包括的レベルのメタファである。

<「秘密を守る」系>

button one's lips
be as close as an oyster
keep it under your hat
hold one's tongue
「口にチャックする」
「具になる」

<「秘密を言う」系>

spill the beans
let the cat out of the bag
come out of the closet
「人の口に戸は立てられぬ」

「秘密」に関するイディオムはどれも、概念メタファを形成するほど生産性が高い語あるいはその概念が用いられているわけではない。しかし、表現上は異なるもののどれも上記の概念メタファにより賦活される次のようなイメージが基盤となって生み出されていることは明白だろう。

- 秘密がある空間内に保持されていれば守られている
- 秘密がある空間外へ移動すれば公になる

「秘密」を意味するイディオムの構成要素は、Kövecses が論じていた *fire* のように生産性の高い概念領域を構築しているとは認められない。しかし『秘密を守る』ということは人間という皮膚を境にした内と外を持つ空間内に情報が留まっていること、逆に『秘密を言う』ということはその空間外へ情報が移動すること、という経験的知識と、状態を場所的に捉える概念メタファの相互作用によって動機づけられているのである。そうであるがゆえに、表現は異なるものの英語でも日本語でも概念レベルでは共通したイメージで捉えられているのである。

3.2. 単発的イディオムと命題的構造のメタファ

命題的構造のメタファでは、経験的に蓄積された典型シナリオ (*prototypical scenario*) と呼ばれる複合的な命題的構造全体が起点領域から目標領域へマッピングされているために、シナリオが表す事態の展開順序も目標領域で保持される。このような特定のシナリオが生み出す概念的対応関係がイディオムを生み出すこともある。例えば *break the ice* を考えてみよう。主に初対面の人の集まりで会話に困っている場面で誰かのユーモラスな発言が打ち解けるきっかけを作るということを表すイディオムである。ここで用いられている *ice* は、生産性のある概念領域を形成するほど多彩な表現を生み出す概念ではない。マケーレブと安田 (1983: 612) によれば、このイディオムは砕氷船が厚い氷を破砕して進んでいく場面に由来する。

【砕氷船に関する典型シナリオ】

- 第1段階：出航
- 第2段階：行く手を阻む氷の出現
- 第3段階：砕氷作業
- 第4段階：砕氷完了
- 第5段階：航行のスムーズな流れを獲得
- 第6段階：寄港／帰港

まず第1段階は「人々が集まること」に、第2段階は「会話の流れを停滞させる重苦しい雰囲気」に、第3段階は「誰かのユーモラスな発言」に、第4段階は「人々が打ち解けた」ということに、第5段階は「会話のスムーズな流れを獲得したということに、そして第6段階は「会話の終了」と対応付けることができよう。このイディオムは、シナリオ全体の中でも特に第3 - 5段階を言語化したものであり、行き詰まった航行の状態からスムーズな流れを獲得した様子を、誰かのユーモラスな発言が緊張で固まった雰囲気をほぐして会話の流れを得た場面に投影しているのである。つまり、出来事の構造の類似性を基盤とした喩えであるためこれもメタファが生み出したイディオムである。

3.3. 単発的イディオムとイディオム学習

前節までに2種類の単発的イディオムを考察した。包括的レベルのメタファによるイディオムは、実は概念メタファが背後に潜んでいて、メタファによる対応関係の規定が行われていることを見た。また、命題的構造のメタファによって生み出されたイディオムは、典型シナリオが象徴的に示す場面が抜き出されることにより、イディオムを形成しているという例を見た。

しかしイディオム学習ということになると、小難しい学問的な分類は必ずしも必要ではなく、目的に対してどの程度「有用」であるかが問われる (在間 2006: 22) ため、部分と全体の意味関係を有意味に結びつけ「記憶に押し込む手がかり」と「記憶から引き出す手がかり」を得られればよいのである (八木橋 2006)。筆者は都内の大学生 108 人を対象にイディオム学習について調査を行った。採り上げたイディオムは *kick the bucket*, *break the ice*, *miss the boat*, *spill the beans* である。授業内にこれら覚えるよう指示を出し、さらに1週間後には記

憶の保持に関する聞き取り調査を行った。まず、形と意味の丸暗記を試みてもらったグループをA、イディオムの生成過程を講義した上でおぼえるように指示を出したグループをBとした。1週間後の聞き取り調査では、Aグループの記憶の保持率はおよそ4% (54人中2人) で、Bグループはおよそ91% (54人中49人) であった。また、Bグループの中で覚えきっていない学生には個々の構成要素の意味を提示したところ、イディオム全体の意味を容易に想起することができた。これは非常に興味深いことで、イディオムの生成過程の講義がエピソードとして記憶に深い痕跡を残していたため(エピソード記憶)、その断片を提示することで全体を想起できたのではないかと思われる。つまり、より深い情報処理ができていているということである。

4. まとめ

本稿ではイディオムの生成に深く関与しているメタファを軸にイディオム学習を考えてきた。重要なことは、イディオムを構成する個々の要素とイディオム全体の意味の乖離をいかに克服するかということであった。無数にある語の中からいくつか選び出し、それらを有機的に結びつけ、繰り返し用いられることで定着した定型表現がイディオムである。選出するという作業を行っているということは、何らかの重要な意味があるからこそ選択しているのであって¹⁾、イディオムは恣意的な語の結合ではないということは明らかである。その選択基準ともなる重要な要素がメタファであり、メタファとして機能するような語が選ばれているのである。

逆に言えば、イディオムを生み出したのはまぎれもなく我々人間であるため、そのイディオムを学習しようとしている者も、なぜそのような語が選択されたのかということを理解することは可能であろう。イディオムを扱う際に教員は「記憶に押し込む手がかり」「記憶から引き出す手がかり」この両者を同時に提供することが求められる。概念メタファを用いてイディオムを体系化し、学習者の理解度を上げる努力が必要である。概念メタファのリストは Kövecses (2002) の巻末にインデックスとして掲載されているので参照されたい。また、このリストに適切な概念メタファがない場合には、より包括的な

レベルの概念メタファが表現の安定を支えている可能性がある。単発的イディオムであっても先に見たように結局はメタファの問題に行き着くのである。さらに、ある具体的な場面が象徴化されて生み出されたイディオムについても同様であった。

以上のことから、丸暗記に走るのではなく、なぜそうなるのかという問いを常に投げかけ、考え、そして構成要素をイメージでつなぐという学習が必要とされているのである。

注

- 1 唐須教光教授(慶應義塾大学文学部)との個人的なやり取りの中で示唆をいただいた。

参考文献

- 1) 相澤一美(2006)「語彙習得をどう捉えるか」、『言語』(4月号)、大修館書店、Pp. 32-37
- 2) 池上嘉彦(1975)『意味論』、大修館書店
- 3) 在間進(2006)「『言語教育学』構築に向けて」、『言語』(4月号)、大修館書店、Pp. 20-25
- 4) 田中茂範(2006)「認知的スタンスと英語教育」、『日本認知言語学会第7回大会 Conference Handbook』、日本認知言語学会(JCLA)、Pp. 173-176
- 5) 寺澤芳雄(編)(1999)『英語語源辞典』、研究社
- 6) マケーレブ・ジャン&安田一郎(1983)『アメリカ口語辞典』、朝日出版社
- 7) 八木橋宏勇(2006)「イディオム学習への認知的アプローチ」『東京工芸大学工学部紀要』Vol. 29. No. 2. 東京工芸大学、Pp. 67-73.
- 8) 横山詔一(2006)「潜在記憶と言語習得」、『言語』(4月号)、大修館書店、Pp. 52-57
- 9) Gibbs Raymond W. and J. O' brien. (1990) 'Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning.' In *Cognition* 36. Pp. 35-68.
- 10) Kövecses Zoltán. (2002) *Metaphor A Practical Introduction*. Oxford University Press.
- 11) Lakoff George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal*

- about the Mind*. The University of Chicago Press.
- 12) Lakoff, G. 2006 [1993]. “The contemporary theory of metaphor”. In Geeraerts, D. (ed) *Cognitive Linguistics: Basic Readings*. Mouton de Gruyter. Pp.185-238.
 - 13) Lakoff, G. and Johnson, M. 1980 [2003]. *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press.
 - 14) Lakoff, G. and Turner, M. 1989. *More than Cool Reason*. The University of Chicago Press.
 - 15) Taylor, J. R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford University Press.
 - 16) Yagihashi Hirotoishi. (2005) ‘Motivations for Idioms: The Patterns of Idioms Woven by Metaphors’, In *Colloquia*, Dept. of English and American Literature at Keio University. Pp. 35-46.